

日蓮聖人の懺悔観

奥野本洋

懺悔という言葉の意味に関し、平川彰博士は、法華文化研究の第二号の中で、「懺悔を考える場合には、そこで懺悔されるものは何かを明確に見きわめる必要がある。」と述べ、又漢訳の大乗経典ならびに律蔵に見られる「懺悔」の原語を検討され、その結果懺も悔も意味を表わす語で「犯した罪や悪業を告白すること」と解釈されている。

日蓮聖人の懺悔観を語るには、天台の「五悔」について当然ふれるべきであろうが、今回は単に日蓮聖人が「法華誹謗の罪」の自覚から反省の心を起こし、懺悔滅罪されている点を佐渡流罪前後の御書を中心にさぐって見た。

たび重なる法難にあわれ死罪流罪の体験から、日蓮一人が法華経を色説したという自覚が生じ、しかしそれを知っているのは日蓮一人であり、多くの者は未だそれに気づかず、法華経の行者を軽しめ、迫害し自ら誹謗法という極罪を積んでいる。日蓮の弟子の中にも懷疑をいだく者が出てきた為、その生命をかけて自らが法華経の行者であり、法華経こそが末法に一切衆生を救済できる教えであることを知らしめんとされた。それにはまず自らが過去世において誹法の輩であったことを述べ、今生において懺悔し、その日蓮が犯した誹法という罪を今同じようにつくっているところの者達に知らせようとしている。日蓮はそのことを黙して語らずば、難に値うこともなく、安穩に今生をすごすことが出来ようが、知っていて語らなければ仏法中の怨となることになり、それを深くおそれんが為に語ることにする。その為には迫害に値わねばならぬが、それにより本當の滅罪が出来ると信じていた。それ故、生命に及ばんとする

日蓮聖人の懺悔観（奥野）

難にあえば、かえってそれが深い深い悦びとなり、来世に大いなる喜びとなると確信していたのである。

謗法罪の認識

謗法罪とは正法誹謗の罪である。日蓮聖人の一生を動かししたエネルギーというものは、謗法の罪の認識から、それを懺悔し正法流布に生命をかけたといっても過言ではなからう。四十一才伊東で書かれた『顕謗法鈔』の中で、

五逆罪より外の罪によりて無間地獄に墮ツことあるべしや。答コタヘ云ク、誹謗正法の重罪なり。問ト云ク、証文如何。答コタヘ云ク、法華經第二云ク、若人ニ不信毀シ謗ヒ此經ヲ、乃至其人命終入リ阿鼻獄ニ等ニ云ク。……懺悔せる謗法の罪すら五逆罪に千倍せり。

(二五四～五)

と述べられ、謗法罪がいかに重い極罪であるかをあきらかにされている。その後、佐渡流罪に至ってそのおもいはさらに強まり、自身の宿世の罪業についての懺悔がはじまっている。『開目鈔』の中で、

疑ウタガハシ云ク、いかにとして汝が流罪死罪等、過去の宿習としらむ。

という疑問に対し、

答コタヘ云ク、銅鏡は色形を顯ハす。秦王驗偽の鏡は現在の罪を顯ハす。仏法の鏡は過去の業因を現ハす。(六〇二)

と述べ、般泥洹經（一）を引いて、その經文が今の日蓮の身にまさしくあたっているとあかしている。『佐渡御書』において、

日蓮も又かくせめ（責）らるるも先業なきにあらず。……不輕菩薩の無量の謗法の者に罵詈打擲せられしも先業の所感なるべし、宿業はかりがたし。(六一四)

と述べ、又、過去ばかりでなく今生においても、

日蓮も過去の種子已に謗法の者なれば今生に念仏者にて数年が間、法華經の行者を見ては未有一人得者千中無一
等と笑し也。(六一五)

と、一時期にせよ法華經の行者を誹謗した罪を反省し、その罪の姿が今自分が法華經の行者として迫害され誹謗されているのであると語っている。さらに『佐渡御書』の中でも『開目鈔』中に引用した般泥洹經を引き、「或被輕易、或形状醜陋、衣服不足、飲食麤疎、求財不利、貧賤家、及邪見家、或遭王難」のこの八句が日蓮の身に感ぜられることだと述べ、やはり法華經の行者を過去に輕易したことがその原因となっていることを明らかにしている。そしてその罪を消す為には、「日蓮つよく法華經の敵を責るることによって一時に聚起せる也」(六一七)と考え、一つずつの難を消し去るのでは尽未来際迄かかってしまうので、一時にすべてを消すという大術を用いるのだといわれる。身延で書かれた兄弟鈔中でも、この般泥洹經を引用、「文の心は、我等過去に正法を行ける者にあだをなしてありけるが、今かへりて信受すれば過去に人を障る罪未來に大地獄に墮べきが、今生に正法を行ずる功德強盛なれば、未來の大苦をまねきこして少苦に値なり。」(九二四)と示している。身延山中の物資の乏しい中ででの生活を通し、自らの謗法の認識を持ち、法華經の敵を責めることによって迫害に値い値難滅罪が墮獄をのがれる道に他ならないと語られる。日蓮の流罪死罪に値うという今の姿がどうしてあるのかということもこれで理解出来るようである。阿仏房尼御前が、謗法の浅深輕重に於ける罪報に關しての質問を身延の日蓮聖人に寄せられるが、それに対し、謗法の罪の浅深輕重の義を問ひ合わせられるとは、日蓮の義を助けることになりまことに不思議なりと返答されている。

改悔折伏

ご自身が過去に法華経誹謗の罪業深きを認識された聖人は、同じ罪を犯しその事に気づいていない日本国の在俗全てに対し、その罪を知らし、改悔させねばと考えるようになる。如説修行鈔の中で、

諸経は無得道墮獄の根源、法華経独り成仏の法也と、音も不_レ惜_レよばはり給_レて、諸宗の人法共に折伏して御覽せよ。（七三六）

と述べ、他をして改悔折伏することが、まずもって日蓮の使命の一つであることをあかしている。『開目鈔』の中で、「念仏者、禪宗等を責て彼等にあだまれたる、いかなる利益かあるや」と問_レい、その答えとして涅槃経の「若善比丘見_レ壞_レ法者。置_レ不_レ可_レ責_レ駝_レ遣_レ舉_レ処。當_レ知_レ是人_レ仏法中_レ怨_レ。」を取り上げ、何をおいても日蓮はこのことを恐れたといわれる。又、同じ涅槃経を引用し「末法には正法の者瓜上_レ土、謗法者十方_レ土とみへぬ」とい_レい、日本国にこのことを知っているのは但日蓮一人であつて、この事を正直に話したならば、父母兄弟師匠国主の王難が必ず来るだろうが、もし黙して語らずば、慈悲をもつて他をも救わんとする精神に反してしま_レうだろう。さらに法華経、涅槃経等を合せ見ると、言わずにいれば今生は大禍なくすごせても、来世は必ず無間地獄に墮ちることだろうと考えられた。日蓮聖人のお考えは、自らが謗法の罪を犯さなくとも、法華経の敵を見てそれを呵責しないということも謗法であるといふことである。

法華経の敵を見て、責め罵り国主にも不_レ申_レ、人を恐_レして黙止するならば、必_レ無間大城に墮_レべし。……南岳大師云、法華経の讎_レを見て不_レ呵_レ責_レ二者は謗法の者也。無間地獄の上に墮_レんと。見て申さぬ大智者は、無間の底に墮_レて彼

地獄の有ん限は出べからず。(一七三九 秋元御書)

日蓮聖人は『立正安国論』の建言に代表されるように、諸宗の謗法を呵責し、国家諫曉を何度もされているが、「見壞法者置不呵責」の禁を恐れんが故に、国中を責め、その為に流罪死罪の生命にも及ぶ難に値われたのである。日蓮の懺悔は、自身だけの謗法懺悔ではなく、他をも責め、それによって引きおこる迫害に値い、そこに生命がけの懺悔の行があると考えられた。

我不愛身命の法門

日蓮聖人はまことに正直な人である。だまっていればあれほどの難にもあわず、すごせたであろうに、聖人の生涯を見ていると、自ら進んで迫害をよび寄せているようにもとれる生き方をされた。我身ばかりが助かるのではなく、「日本国の一切衆生、法華經を謗じて無間大城におつべきを、たすけんがために申法門なり」といわれるように、そこには慈悲をもって他をも救わんとする日蓮の姿がみられる。自分自身の為であれ、他をも救わんが為であれ、正直に生きればどうなるのかはよくわかっていたはずである。不安が無かったはずはない。しかし日蓮の考えの中には、今生の恐れより、後世の恐れの方が強かったであろう。

わづかの小島のぬしらがをどさんを、をぢては閻魔王のせめをばいかんがすべき(九六二 種種御振舞御書)

のご遺文に見られるように、国主並びにそれらの力を借りている諸宗の僧らから責められようが、日蓮は正法流布という大願の為に正直に生きるのだと自身にいきかせている。松野殿に宛てた手紙の中で、「受がたき人身を得て、適々出家せる者も、仏法を学し謗法の者を責ずして、徒らに遊戯雑談のみして明し暮さん者は、法師の皮を著たる畜

生也。」（二七二）と述べているが、これらの言葉は、自分自身が真の法師である為には謗法の者を責めずに安穩なる生活をしていたのでは、「法師というのは名ばかりであって盗人のようなものである」とまでいわれるのである。そして「迹門は我不_レ愛_二身命_一、但惜_二無上道_一」とき、本門には不_二自惜_二身命_一とき、涅槃経には身_レ軀_レ法_レ重_レ死_レ身_レ弘_レ法_レと見えたり」（二七二）と經文を引いて自分自身を励まされるのである。自分は迫害をおそれて身命を惜むような凡僧なのだろうか、それとも我不_レ愛_二身命_一を實踐できる真の僧なのであるか、日蓮は迫害からのがれるのではなく、迫害を受ける方を選ぶのであった。

自覚の法門

日蓮はその遺文の中で、よく「日蓮一人この事を知れり」とか、「日蓮なくば誰をか法華經の行者として仏語をたすけん」という表現をされている。自信家なのであろうか自意識が過剰なのだろうか、いやそれだけの自覚、覚悟をもたれていた人なのである。「日蓮は度々知つて日本の道俗の科を申せば、是は今生の禍、後生の福也」と覚悟を決め、法華經の行者として値難滅罪の認識を深めていく。『呵責謗法滅罪鈔』で、「過去の謗法、我身にある事疑なし」（七八〇）と述べておられるが、自身に謗法の失があることがわかった以上、いかにしてこの重罪を消せるのが問題となる。先にも述べたが「無量劫の重罪一生の内に消_二なん_一と謀_二たる_一大術」を用いるわけだが、「日蓮を怨み、或は頸を刎、或は流罪に行ふべし。度々かかる事出来せば……」といわれるように、「悪口罵詈、刀杖瓦礫教見擯出」と説かれている經文の如くのめに値つてこそ真に法華經をよむことになるのだらうと悟られている。

『開目鈔』では、「法華經の行者あらば必三類の怨敵あるべし。三類はすでにあり。法華經の行者は誰なるらむ」

(五九九)と語り、自身の身の上を經文にてらしては、何度も何度もその自問自答を繰りかえし、自身が法華經の行者であるとの認識を深めていられる。その中で「御勘氣をかほ(蒙)ればいよいよ悦をますべし」といわれるように、值難滅罪から懺悔の念が深まり、それがやがて法悦へと移っていかれるのである。ここでは日蓮は過去の不輕菩薩と自身とを同じ立場に置くようになつていく。『佐渡御書』の中で、般泥洹經の八句を引用し、「此八句は只日蓮一人が身に感ぜり。」と述べ、「高山に登る者は必下り、我人を輕めば、還て我身に輕易せられん。形状端嚴をそしれば醜陋の報イを得。人の衣服飲食をうばへば必餓鬼となる。……」等の因果を明らかにされるが、日蓮聖人がこの八句を受けているのはその因縁によつてではなく。法華經の行者を過去に輕易し、法華經を或は上げ或は下して嘲哂せし故にこの大難に値つてゐるのだといわれる。又、『転重輕受法門』には、「不輕菩薩の悪口罵詈せられ、杖木瓦礫をかほるも、ゆへなきにはあらず。過去の誹謗正法のゆへかとみへて、其罪畢已と説て候は、不輕菩薩の難に値ゆへに、過去の罪の滅かとみへはんべり」(五〇七)と示されている。日蓮も今、当世の王臣がいなければ過去の誹法の重罪は消し難いことであろう。なぜならば、日蓮は過去の不輕の如くであり、当世の人々は不輕を輕毀したところの四衆の如くであるからだ。『佐渡御書』中に述べられている。

不輕と同じ立場にあるのだということは、日蓮をして大いに勇氣づけたことであろう。法華經常不輕菩薩品第二十の中に「彼時不輕則我身是」とあり、釈尊がその時の不輕は即ち今の自分であるとあかしているのと同じで、日蓮も彼の不輕は今の日蓮といわれるのである。『呵責謗法滅罪鈔』の中で、

日蓮が失もなきに高きにも下きにも、罵詈毀辱刀杖瓦礫等ひまなき事二十余年也。唯事にはあらず。過去の不輕菩薩の威音王仏の末に多年の間罵詈せられしに相似たり。……日蓮は彼の不輕菩薩に似たり。(七八六)

といわれ、又、『四条金吾釈迦仏供養事』の中に

もしやの事あらば、先生に法華經の行者をあたみたりけるが今生にむくふなるべし。此事は如何なる山中海上に
 てものがれがたし。不輕菩薩の杖木の責も、目健尊者の竹杖に殺れしも是也。（一一八八）
 ともいわれている。

日蓮聖人はこのように、現世に重大な失が無くとも、過去世における法華誹謗の罪があつたのだからという事を追
 害に値いながら認識されていかれた。又、その姿があつたの不輕菩薩にも似ていると考へるようになり、時代は異なれど
 も、經文にしるされてゐる事が一々符合する事に対し、「日蓮なくば仏語は妄語となりぬ」とまで確信されるようにな
 る。佐渡に流される直前、寺泊にて富木氏に宛てた手紙には、「或人難^{シテ}日蓮云、不^レ知^レ機立^ニ顯^ニ義^一値^レ難^ニ。或人
 云如^ニ勸持品^一者、深位菩薩義也。違^{スト}安樂行品^ニ。或人云我存^ニ此義^一不^レ言^ハ云。或人云唯教門計也。」（五一四）とい
 うことに対し、「法華經三世說法儀式也。過去、不輕品ハ今、勸持品。今、勸持品過去、不輕品也。今、勸持品未來可^レ爲^ニ不輕
 品^一。其時日蓮可^レ爲^ニ不輕菩薩^一。」（五一五）と述べ、今勸持品を色説した日蓮は不輕菩薩と寸分違わないと思
 いをもたれている。

僭聖増上慢の事

「日蓮一人この事を知る」とか、「日蓮なければ」という表現をみると、他の者からみれば、日蓮という僧は
 慢心の人であるかのように見えることもある。しかし、当時それぐらいの心意気をもたなければ、あの厳しい時代に
 国を諫曉し、法華經を流布するという大願は計わなかつたであらう。日蓮は勸持品の偈の中に法華經弘通の三類の強

敵を指摘しているが、俗衆増上慢、道門増上慢、僭聖増上慢は一体誰なのかを遺文中に追求されている。そして最終的に折伏せねばならない僭聖増上慢をあきらかにされていく。『撰時抄』の中で、般泥洹経をとりあげ、「有_下似_三羅漢_二一闍提_上而行_三惡業_等云云。此等の經文は、正法の強敵と申_スは惡王惡臣よりも外道道魔王よりも破戒の僧よりも、持戒有智の大僧の中に大謗法の人あるべし。……法華經の行者は貧道なるゆへに國こそぞつてこれをいやしむ候はん時、不輕菩薩のごとく、賢愛論師⁽¹⁸⁾のごとく、申つをら(強)ば身命に及ぶべし。此が第一の大事なるべしとみへて候。此事は今の日蓮が身にあたれり。……日本國にして此法門を立_ハは大事なるべし」(一〇六〇—一)と述べ、今日蓮は國中からいやしまれ、それに反し、生き仏、羅漢の如くに仰がれている道隆や良観がいるが、どちらが真の僧侶なのか、これは大事なことであるといわれる。日蓮は、自分だけが聖僧であると言っているのではない。自らの過去につくった法華誹謗の罪を深く反省し懺悔し、そして今、聖僧づらをして仏教界に君臨している増上慢の輩を責めている。四条金吾殿に宛てた手紙の中で、「当世の僧を見るに、人にかくして我一人ばかり供養をうくる人もあり。是は狗犬の僧と涅槃經に見えたり。是は未來には牛頭と云鬼となるべし。……日蓮此業障をけしはて、未來は靈山淨土にまいるべしとおもへば、種々の大難雨のごとくふり、雲のごとくにわき候へども、法華經の御故なれば苦をも苦とおもはず。」(四九四)といわれ、自分は狗犬のような僧であつてはならないといつもく反省され、前世にこのような業障があるならばそれを消しはててと考えると、値難滅罪、懺悔の念が深まり、真の僧としての姿をめざしている。又、『開目鈔』の中では、涅槃經を引用し、「我涅槃後乃至正法滅後於_レ像法中_レ當_レ有_二比丘_一。似_レ像持律_三少_二讀_三誦經_一、食_三嗜飲食_一、長_三養其身_一。雖_レ服_三袈裟_一、猶_レ如_三獬師_一、細視徐行_一、如_三猫伺_レ鼠_一。常唱_三是言_一。我得_三羅漢_一。外現_三賢善_一、内貪嫉_一。如_レ受_三瘧法_一、婆羅門等_一。実非_三沙門_一、現_三沙門_一、像_一、邪見熾盛、誹_三謗正法_一等云云。」(五九二)

日蓮聖人の懺悔觀（奥野）

と述べ、沙門の像を現じて正法を誹謗するところの僧を強くせめている。この「似像持律云云」について、『下山御消息』にて

今末法の代に比丘レ似像を撰レび出さば、日本国には誰の人をか引出テて……少説三誦經一云云。相州鎌倉レ極樂寺の良觀房にあらざば、誰を指出テて經文をたすけ奉ルべき。次下の文に猶如二彌師一細視レ徐行一如二貓伺レ鼠一外現三賢善一内懷レ貪嫉二等一云云。両火房にあらざば誰をか三衣一鉢レ彌師レ伺猫として仏説を可レ信一。（一三一九）

我々の懺悔

日蓮聖人は、僭聖増上慢としての良觀を強くせめられた。慈善事業を行ない、多くの人々から生き仏の如くに仰がれたその人を。日蓮は自らはそうであつてはならないといきかせておられたはずである。日蓮聖人滅後七百年が過ぎた今、日本国中に僧籍を有する人はかなりの数にのぼっている。日蓮の教えを信奉する日蓮宗の僧侶の数もかなりのものである。過去の誹法罪を消さんが為に流罪死罪を一度にあつめ懺悔することによって正直なる僧の自覚をされた日蓮聖人の時代と今とでは、時代や立場がちがうといえばそれまでであるが、日蓮聖人はこの御題目を唱へる我々に御書の中で遺言されているのだと思う。その事に我々は目覚めなければならぬ。いいかげんな僧は誹法者であり、墮獄まちがいなしと警告されているはずである。充分に認識されている人も多勢いようが、再認識の時ではなからうか。

食法がぎと申スは出家となりて仏法を弘むる人、我は法を説けば人尊敬するなど思ひて、名聞名利の心を以て人

にすぐれんと思^スて今生をわたり、衆生をたすけず、父母をすくふべき心もなき人を、食法がきとて法をくらふがきと申^スなり。当世の僧を見るに、……………(四九四 四条金吾殿御書)

この御書は七百年前に書かれたものであるが、ここで当世の僧を見るに……………の当世が鎌倉時代ばかりでなく、今もつて続いているのではなからうか。日蓮門下というならば驕慢な心を捨て、日蓮聖人の生命がけの懺悔滅罪の心の一分を習わなければならないだろう。

〔註〕

- (1) 「善男子過去曾作無量諸罪種種惡業。是諸罪報惑被輕易。或形状醜陋衣服不足飲食麤疎求財不^レ利生貧賤家邪見家^一或^レ遭^三王難^二及余種々人間苦報。」
- (2) 阿仏房尼御前御返事 一一一〇頁取意。
- (3) 定遺六〇七頁
- (4) 開目鈔 五五五取意。
- (5) 種種御振舞御書 九六五頁
- (6) 一谷入道御書 九九三頁
- (7) 開目鈔 五六〇頁
- (8) 弥源太入道殿御消息 一五四九頁
- (9) 佐渡御勘気鈔 五一〇頁取意。
- (10) 開目鈔 五六〇頁
- (11) 一或被輕易、二或形状醜陋、三衣服不足、四飲食麤疎、五求財不利、六貧賤家、七及邪見家、八或遭王難等」
- (12) 定遺六一七頁
- (13) 撰時抄一〇三九頁に賢愛論師がどのような人であったかが書かれている。

日蓮聖人の懺悔観(奥野)

日蓮聖人の懺悔観（奥野）

- (14) 定遺五九六頁並びに波木井殿御返事七四六頁にも同じ表現がみられる。
- (15) 室住一妙著『純粹宗学を求めて』四四頁、四五頁参照